驚異の谷間

蜂蜜神社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
驚異の谷間

【Ｎコード】
Ｎ８０４４Ｑ

【作者名】
蜂蜜神社

【あらすじ】
探偵学院を卒業したシャロのおはなし。
シャロはアルセーヌとの戦いの中、一つの謎を問いかけられたが、その後アルセーヌは姿を消してしまう。
あるとき、アルセーヌからの謎と失踪に悩むシャロの前に新たな敵が現れる。
不安定なシャロは、それでもなお、たった一人で怪盗に立ち向かう。

「さぁ追い詰めましたよ怪盗アルセーヌ！　盗んだものを返すんです！」
　偵都ヨコハマに林立する高層ビルの一つ、港近くに位置するその屋上で二つの影が対峙していた。一人は顔をマスクで隠した女性、もう一人はまだ少女と言ってもいいくらいの年齢だ。少女の桃色の長い髪がビル風でなびいている。
　アルセーヌと呼ばれた女性はふわりと、落下防止のために申し訳程度に設置してあるフェンスへ舞い降りた――追い詰められることには慣れているとでも言うよう。
「ふふ。私は何も盗んではいませんわ。それに……盗んだというなら貴女の方でしょう？」
「そんなっ、何を言ってるんですか、わたしは探偵です！　あなたたち怪盗と一緒にしないでください！」
「探偵だから盗まない。そんなことを言っているようではまだまだですわ、シャーロック。探偵なのでしょう、推理してみてはどうかしら？」
　マスクの奥からじっと少女を見つめて、軽やかに微笑んだ。
「ではまた参りますわ。そのときまでに……」
　アルセーヌが右手を挙げた。
「幻惑のトイズ！？」
　だが、右手を挙げたのはフェイク。
　シャーロックがつられて右手を目で追ったときには、アルセーヌは、タンッ、と軽やかにフェンスを蹴り、後ろ向きに跳んでいた／マントをはためかせ落ちていく。
「アルセーヌっ！」
　たとえ世間を騒がす怪盗といえど、学院の生徒だったころから――まだ一人前の探偵になる前から――幾度となく戦ってきた／ずっ

とライバルだと思っていた。きっとアルセーヌもそう思ってくれているだろう、敵同士にもかかわらず気心が知れていた。
悪いやつだとか逮捕しなければならない相手だとか、そんな考えは一瞬で頭から消えていた。気付けば身体が動いていた――駆けより／体を乗り出し／なのに手を伸ばしても届かない――挑むような眼をしたアルセーヌが、手を大きく広げたまま落ちていく。
地面に激突するかと思われた直前、アルセーヌは真っ赤な薔薇の花びらに包まれ、大通りにははじけるように散った薔薇だけが残った。手品のように消えてしまっていた。

それから数ヶ月が過ぎた。
怪盗帝国＝アルセーヌからの犯行予告は一切なし／音沙汰なし――確かに「また」と言ったのに。
怪盗帝国が鳴りを潜め、犯罪が減少するかと思われたが、しかし事態は深刻だった。
かつて怪盗帝国がヨコハマを征服しかけたとき以上に、ヨコハマの情勢は悪化していた。怪盗帝国の影で目立っていなかった他の怪盗たちの犯行が大々的に――怪盗としての矜持など持っていない者たち＝トイズを悪用／濫用――ただの犯罪者。怪盗帝国の存在が他の犯罪者の抑止力となっていたことが判明した。
シャーロックもそれらの事件にかり出された。他の探偵との連携／たまにミルキィホームズの四人で捜査することもあった。警察に協力／トイズの力で犯人捕縛に尽力――恒例となった逮捕後の記者会見に出席／カメラのフラッシュに笑顔を振りまく日々。
『今回も大活躍ですね！』『危険な場面もありましたがお怪我は？』『さすがあの怪盗帝国を倒したミルキィホームズさん！』――もはやアイドル並みの扱い＝隠し撮り写真がインターネット上に出回る／公式グッズまで発売される人気ぶり――写真集／カレンダー／C

D・DVD・BD／トレーディングカード／フィギュア……その他たくさん。

『怪盗たちがいなくなって、一日でも早く事件がなくなるように、わたしがんばります！　わたしたちをここまで育ててくれた会長や小林さんのためにも！』

カメラの前で笑顔で手を握り合うシャーロックと警察らを光の洪水が明るく照らす。

追いかけられなかった。飛び降りてまで助けようとはしなかった。結果的にアルセーヌは死にはしなかっただろう。だが、今なお自責の念が重くのしかかり、シャーロックの頭の一辺を占めていた。顔は笑った形を作れてはいても、笑顔には程遠いと自覚していた。

一面ピンク色＝女の子らしい部屋というイメージを足下から瓦解させる代物――シャーロック・シェリンフォードのポスター／学院時代のシャーロックの髪型を模したマグカップ／グッズ／隠し撮り／布団カバーやテーブル、ポスターの貼ってある壁紙すらシャーロック柄／メイド服＋ネコ耳＋しっぽ×トルソー／極めつけの品――瓶や箱に詰められた桃色の体毛や液体＝探偵学院時代にシャーロックの部屋から回収したもの。

だが／しかし、その全てが埃を被ってくすんだようになっていた。部屋の住人はいない。もう半年近くこの部屋は無人だった。

最後にシャーロックと会ったのはたかだか数ヶ月程度。だがもうずいぶんと前のようにアンリエットには感じられていた。

あのとき、高層ビルから飛び降りた後、幻惑のトイズでシャーロックの目をごまかした。私服に着替えて、一般人として何食わぬ顔で現場から離れた。

そして家に帰ってからつけたテレビで、シャーロックが記者会見を受けているのを見た。
『がんばりますっ！』
泣きそうなのにそれを我慢している顔で言っていた。悲しみを押し隠して明るく振る舞ってみせていた。あの子の笑った顔はあんなものじゃない。いつも側で見ていたのだ。あの笑顔を見ているだけで優しい気持ちになれる気がした。
声だって元気がなかった。底抜けの明るさはどうした。あの子が誰かと楽しそうにおしゃべりしているのへ無理矢理にでも入っていきたいのを何度我慢した？
だというのに。
そんな顔をさせてしまったのが自分であることは分かった。あの子に強くなってもらって、そうしたら自分も本気で怪盗として戦える――そう考えての行動だった。裏目に出たのだ。あの子はたとえ敵でも優しくあった。私があの子を悲しませた。
いなくなった方が良いと思った。あの子にあんな顔をさせてしまった私は最低の人間だ。
だが死を選ぶほど強くはなかった。未練が残る。
ミルキィホームズと――シャーロックといた日々を思い出すと、どうしようもなく胸が痛んだ。

万が一でもシャーロックと出会ってしまわないように隣県に逃げた。前の部屋はどうなっているか分からない。
なにもせず、ただ生きているだけ。おなかが空いたらコンビニに行き食料を買って、食べて、寝て、次にコンビニに行ったときゴミを捨てるだけの生活を繰り返した――『家庭ゴミは捨てないでください』と書いてはあるが、もともとここで買ったものだし、元よりそんなことはどうでもよかった。服も前着替えたのはいつだったか定かではない。
起きているときは、電気も点けずカーテンを閉め切った部屋でテ

レビを見るくらい。適当にチャンネルを変えて漫然と流すだけ。なのにいつもニュースでシャーロックが出てこないか追っていた。
今日もいつも通りチャンネルを切り替えていた。
ただし違うのはその内容。
実況生中継――犯行の予告状を出した怪盗／追う警察＋探偵――桃色の長髪＝シャーロック・シェリンフォード。テレビ局による、視聴率稼ぎ丸分かりなわざとらしい驚きと興奮と喧噪が織りなす混声大合唱。

怪盗――立て続けにそこら辺のものを打ち上げた――飛来する鉄柵やバカでかいコンクリートの雨。
「まさか念動力（サイコキネシス）……！？」
対するシャーロック――防戦一方。操作できるものの数に制限はないが、一つ一つは１ｋｇ以下でなければならない。そのせいでずっとコンプレックスを抱えていた。同じように念動力のトイズを持った怪盗――おそらく重量に制限がない／ほとんど同時に操作――きっとわたしよりも強いトイズ。
敵うはずがない――自らのトイズの使い方を熟知している怪盗／トイズに対する疑問とコンプレックスがシャーロックを苛んでいった――トイズの性能差が精神的優劣を生んでしまった。
ちっぽけなわたしのトイズじゃ勝てるわけない。

港沿いにある、偵都ヨコハマを象徴するランドマークタワー。その上空をテレビ局のヘリが旋回／撮影しているが、探偵と怪盗の戦いの壮絶さには近づくことすらままならなかった。また警察も優秀な人材を有しているとはいえ、所詮トイズなど持ち得ない一般人に過ぎず、怪盗の前には刃が立たなかった。仕方なくタワーの周囲を

取り囲むにとどまっていた。
「シャーロック……」――きつく巻いた金髪ツインテール＋大きなリボン／聡明さを湛えた青い目／厳めしい警察の制服に包まれた小柄な体／腕章＝Ｇ４の文字――明智小衣が、心配そうに呟き、上を見上げていた。

『おじーちゃああん！　ネロ、エリーさん、コーデリアさん！　あ……アンリエットさぁん！』
真っ暗な部屋の中、死んだ魚の目に光が灯った。
ああ、『アンリエット』とあの子が呼んでいる。貴女を悲しませた私を呼んでくれている。
私はなんて単純でバカなのだろう。あまりの嬉しさに頭の中でクラッカーがはじけまくっているみたい――パンパカパーン！――奈落の底で鳴り響く奇跡に等しい桃色の天使祝詞。
だがテレビの向こう側ではシャーロックが傷ついている。どこかの怪盗が私のシャーロックを傷つけている。喜んでいる場合じゃない。
すぐにでも行かなくては／だがもう数日は風呂に入っていないし櫛も入れていないこんな髪であの子の前に出られるものか／ならいっそ幻惑でごまかす？　いやそんなことは矜持が許さない。なによりあの子に対して不誠実で不貞だという、焦燥と躊躇と逡巡と自己嫌悪の狭間で揺れ動いた結果――一瞬間の行動不能に陥る／直ちに復帰するもあえなくその場で一回転――久しぶりの急激な運動のために足がもつれ、間抜けなほど見事にスッ転んだ――「ひゃあんっ……」などというかつてのきりりとした会長を知っているものが聞いたら、『そんなはずはない』と見て見ぬふりをするか、『会長でもあんな可愛い声をするんだ』とそれまでとは違う方向性のファンが増えるに違いない声を放って。

立ち上がり、朱くなる暇もないまま浴室に駆け込んだ／熱いシャワーを頭から浴びた／速攻で着替え部屋を飛び出した。
「シャーロック……っ」

たとえたくさんのものを動かし盾にしようと、重量差で押し負ける——防壁代わりに重ねた床材が破られる／眼前に捻じ切れたパイプが迫る。
動けない。
もうダメ……。強く目を閉じた——目の前のものを見ないように／一瞬後の自分自身を見なくて済むように。

「メテオ」

粉塵をひときわ強い風が持ち去った。怪盗とシャーロックの間の地面が抉れていた。シャーロックの前に背を向け立つ誰かの姿＝アンリエット・ミステール。
「アンリエットさん……どうして……」
ちゃんと声は出るだろうか、コンビニですら会話はしていない。
「が……学校を卒業しても、まだまだですわねシャーロック。しかっしかたがないので、助けに来て……さ、さしあげましたっわ」
駄目だった。シャーロックに話しているという事実が声を震わせる／喉を引きつらせる／情けなさで泣きそうになる。せっかく顔を見られないように背を向けているのに、こんな声ではバレてしまう。無事でよかったと抱きしめたい。貴女を悲しませてしまってごめんなさい。貴女がいないと毎日が色褪せてしまう、貴女がいないとどうにかなってしまいそう——事実、どうにかなっていた。トイズを

失ったダメダメミルキィホームズを退学させたときは物に当たることでなんとかした。だが、今回はそれすらできなかった。生きることすら放棄したくなった。
「あ……ありがとうございますっ。ほんとうに、助かりました」
「元気そうね、シャーロック」
『助かりました』――助けられたのはこっちのほうだ。
「はい、元気……です。かいちょ……じゃなくて、アンリエットさんに会えてよかったです、こんな時ですけど」
もう卒業しましたし生徒じゃないんですよね、えへへ、と言いかけて頭をかく姿に、いろんな感情がごたまぜになって溢れかえり出口を求め、
「……っ！」
耐えられるわけがない――ダムが決壊したかのように想いがこみあげた。まだそんな顔をするのか。アンリエットではダメなのか。もういっそのこと私がアルセーヌだと告白してしまいたくなる――なんという甘美な誘惑。だが結局、その後のことを思うと足が竦んで何も言えない。
騙していたのかと軽蔑されたら私は……。
ぎゅっと抱きしめて、一回り小柄なシャロに顔をうずめて、堪えきれず嗚咽が漏れた。力が抜けて膝をついた。この子の前では気丈な生徒会長でいたかったのに。
「ごめんなさい……！」
ごめんなさいと繰り返す。
「私は……貴女がいないと駄目なのです」――どうしようもなく。
「わたしもアンリエットさんと一緒がいいですー」
すがるアンリエットの背をあやすように優しくぽんぽんしながらシャーロックが言った。
そして――ヘリのローター音とは違う、破壊的に耳を聾する轟音。
音に振り向く二人――あまりの巨大さに遠近感が狂う。
逆さに浮いた大ヨコハマ時計塔（ジャック・ザ・クロッカー）――火傷を負った怪盗の全身全霊

／何故か突然降ってきた隕石のせいで満身創痍――八つ当たり的ブチ切れ。

「あんな大きいの……どうしようもないです……」

シャーロック――敵がトイズではるか高い宙に持ち上げたものを見てくずおれそうになる。

大ヨコハマ時計塔（ジャック・ザ・クロッカー）――大正時代に開港五十周年を記念して建てられ、その後震災や大戦を耐え抜いた歴史的建造物にして国の重要文化財。講堂を併設しその窓は全てステンドグラスという過剰だが質実剛健な印象／ヨコハマらしい赤煉瓦造り／近未来的デザインの高層ビル群の中にあれど、否、その中だからこそ際立つ優雅で確かな存在感。

ヨコハマ三塔の内のひとつ＝トランプのジャックを冠する塔屋――他のキングとクイーンとともに一望できる場所を巡れば願いが叶うという言い伝え――多くの人が願いを託した／偵都市民だけでなく遠くから来る者もおり長らく親しまれてきた。

そんなものが浮いたことで慌ただしくも続々と集まりだすテレビ局、新聞社をはじめとしたマスコミ関係者／騒ぎに引き寄せられた野次馬――誰もが驚愕／累乗的に大きくなっていく狂騒曲。

「シャーロック。立ちなさい」

アンリエットがそばに立ち手を差し出した。

よく分からなかったけど泣いていた――すこし、いやかなり、こんなアンリエットさんも可愛いと思ってしまった――アンリエットさんはいなくなっていた。

そこには、いつもの／いつだって憧れていた、かっこいい生徒会長がいた。どこかで見たことのある、不敵に笑い、敵を射貫く強い眼差し――その眼が安心しなさいと言っていた。

「アンリエットさん……でも……」

「援護します、一緒に」
「でも、でも、どうするんですか！」
「認識しなさい。覚えていないかもしれませんが、貴女はトイズを使いこなしたことがあるのですよ。忘れていても、貴女にはそれができるのです」

――重さの制限こそあれ、操る〈もの〉の数の制限が貴女のトイズにはない。
――たとえ〈極大〉であれ、突き詰め／バラしたならば〈極小〉の集合体に他ならない。
――ならば、貴女に操れないものなど存在し得ない。

ミサイルに対しＢＢ弾で立ち向かい、砲弾を止めるどころか撃ち砕けと言っていた。或いは、同じくミサイルを撃てと――無茶の上に無茶を重ねる行為。
それができると信じ切った声で。
「怪盗としての美学のない者に負けてやるつもりはありません」

「来ますわ！　自分をお信じなさい！」
アンリエットさんが信じてくれている／隣にいてくれている――それだけで勇気が湧いてくるような気がした。
ぐっと両手を前に――倒すべき敵に突き出し、ぎゅっと眼を閉じた。おねがい……！

暗闇を明るく照らし出す稲光。

当時は、『たわわに実った』という言葉では到底足りないほど巨大な胸にばかり気を取られていた。豊饒とはこれかと思った。全て

を包み込む母なる大地を知った。学院を卒業して、ミルキィホームズとして4人でいることが少なくなって、一人で不安になったときだって、泣きたくなるようなことがあったって、あの胸のあたたかさを思い出せばまた頑張れた。

そして、ミルキィホームズとしてではなくシャーロック・シェリンフォードとして事件に関わり怪盗と戦ってきて、それまで以上に、常に凛とした姿に憧れを抱くようになっていった。ときに厳しかったけれど優しかった。綺麗だった。

今だって、ダメダメダメな私を信じてくれていた。

泣き言を言って、諦めていた――諦めなければなりたい自分になれると言ったのは自分じゃないですか――そのことを思い出させてくれた。

――大好きな人の隣に並べるのなら／こんなにも想ってくれているのなら、トイズが弱いからってうじうじしてちゃいけません。そんな劣等感なんて振り切ってやるんです。

立て（Stand up）――憧れていたならばその姿に少しでも近づけるように。

進め（Break up）――撃ち倒すべきは敵であり、打ち克つべきはダメダメダメな自信のない自分なのだ。

できると言ってくれた。応えたい。

雷鳴が轟いた。雨も降っていないし、雲一つないというのに。

大時計塔が落ちてくる。

超重量が唸りをあげて、アンリエットとシャーロックめがけて落ちてくる。

さあ、眼を開け（Get up）。

光が瞬き、頭の中がとてもクリアに冴え渡っている――神懸かりじみた集中力／全能感。

「あ・あ・あ・あ・あああああ！」
屋上部から下部にかけて緩く湾曲したデザインのビル――まるで巨大なナイフ。地面から念動力で引っこ抜いた／逆さになった大時計塔に切っ先＝屋上側を向けて撃ち出した――ローズピンクの光を纏って。
ランドマークタワーを三角形を描く頂点の一つとして、南東と北東の空にそれぞれ滞空／射出。
崩壊――ぶち当たった部分から食い荒らすかのように互いを破壊していった。

ランドマークタワーの少し先――ヨコハマの港湾区画。近未来的なデザインの建築物が立ち並ぶ一方、未だ明治期の建築物が残る一帯を囲むように緑化公園が整備されている。夜景の美しいデートスポットとして人気があった。
ただ、今はそこらじゅうに騒々しいまでに被害の跡が見られ、お世辞にも美しい景色とは言えない状態となってしまっていた。外壁が剥がれたり、屋上が荒れまくった程度ですんだランドマークタワーはまだマシで、大時計塔とＩＣホテルは瓦礫の山と化していた。
それらを一望できる観覧車の中にシャーロックとアンリエットはいた。ゆっくりとゴンドラが上昇／ゆっくりと景色が拡がる。
「わたし、アンリエットさんみたいになります」――唐突すぎるシャーロックの宣言。
言われた当のアンリエット＝「は……え……？」――虚を突かれて咄嗟に反応できず。外の景色など一瞬で見えなくなった。
「いつでもかっこよくてきれいでつよい探偵になりたいんですっ！」
ぐっと両手を胸の前で握って、無垢な仔犬に似てきらきらした眼でのぞき込んでいた。

ああ、そっちですか……――ちょっと／かなり落胆（がっくり）。うっかり『アンリエットさんになります』と聞き間違え、頭の中でクラッカー乱発どころではない大音声を鳴り響かせてしまうところだった――すさまじいピストン運動による鐘の連打＝リンゴン、リンゴン、リンゴン――ウェディングベルと二人のウェディングドレス姿。願望が今までにないくらい暴走している――自分が幻惑にかかっていては世話はない。あるいは、本当に怪盗をやめてシャーロックと一緒に探偵をやるのも良いかも――手を繋いで怪盗に立ち向かう二人を想像しかける／またもや暴走する願望＝妄想。

だが／もしも、それが本当に本当だったなら――。

慌ててシャーロックに向き直り、きりっとした表情を作る。

「追いかけて来なさい？」

――私は、もうすでに貴女に追い詰められているのですから。

（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
ミルキィホームズにはそぐわない文体ですが。感想などいただけたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8044q/

驚異の谷間

2011年2月10日21時55分発行